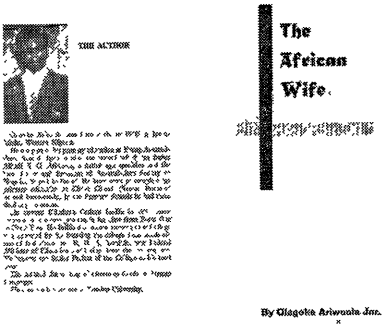
文献紹介

オラゴーク・アリウーラ著

# アフリカの妻

黒木三郎




本書は、一九六五年にケニオン出版社から刊行された。著者のオラゴーク・アリウーラは一九四〇年西ナイゼリアのイペツ・モゾで生まれ、現地でキリスト教的な学校教育を受けたが、非常な秀才で三学年超躍進級するほどであった。一九五五年イレ・イフェのオドゥドゥワ大学に入学したが、現在はロンドン大学で科学を研究している。本書はB6一二三頁の紙装版であり、全七章から成っている。以下にその内容を紹介しよう。

まず第一章では、アフリカの社会が父系と母系の二類型からなる種族社会によって構成されていることを述べる。父系の種族は、父または男性を通してのみ子孫がたどられるから母は無視され、息子の結婚に至るまでの過程すなわち女友だちの紹介、婚約、嫁資などは、すべて父および家族内の男性を通してのみおこなわれる。しかし、母系の種族では、逆に男性は全く無視されている。

十歳代の男性は、ここ数年前から急速に変化してきた。とくに、経済的に独立できる十歳代の男性は、両親の束縛から自由で、公的活動にもたずさわるし、ホテルやダンス場にも出入りしている。しかし、自由を与えられた彼らは、時とすると堕落への

自由となり、その結果性病患者も増加している。男女の交際は自由で、とくに男性は多くの女友だちをもっているし、最近は早婚が目立ってきた。十数年前には三十才か四十才になるまでは経済的理由で結婚できなかったが、今では若いうちに結婚し、結婚生活に失敗すれば「ワイシャツをとりかえるのと同じように妻をとりかえる」こともできる。しかし、近親結婚は両親に反対され、とくに女性は父の息子や孫、従兄弟、甥などとの結婚は禁止されている。

最近の男女は、学校教育を通じて友情を親密にし、さらにより深い理解に達するようになっている。やがて一組の男女が結婚したいと思うようになると、男性側の親か親族の代表が女性側の親のところに行って結婚の申込みをして相手側の意見を求める。このような公式紹介は、一般的には事前に当事者の合意があるので女性側の両親の同意は容易に得られる。多くの種族の間では、この公式紹介に際しては金銭の支払はないが、男性側からの贈物がなされることはある。しかし、特殊な種族では、その後の婚約よりも公式紹介を重要視して多額の金銭が支払われることもある。南アフリカのズルスに住むローデシアのマタベレ族の間ではカンガズエと呼ばれるものが支払われる。その額は以前は五シリング程だったが、最近では三〇ポンドにもなっている。

この公式紹介がおわると、両当事者はもちろん両者の家族間に当然相手を遇する態度が変ってくる。

つぎに婚約は一般に重要行事であり、その期間は六乃至一二ケ月ぐらいである。西ナイゼリアのヤルバスではとくに婚約が重視され、この期間に女性側の親は娘にしっかり花嫁としての教育を授ける。なお、婚約に際しては男性側から女性側の家族に贈物がおくられ、その内容も特定されている。例えば、ヤルバス族では、山いも、コラナッツ、ワニ胡椒のさや、瓶入りの蜂蜜等である。婚約のお祝は常に女性の両親の家で行なわれる。婚約の後に男性側から女性側に対して嫁資が払われる。その内容はしばしば女性側で決定されることがある。山羊、羊、雄牛、雌牛、雌雄の鶏等の飼育された家畜が多い。これらの代りに金銭を払う場合もある。男性側が貧乏で嫁資を払えなければ一定期間農場で働かされることがある。金銭の場合はガーナ、ナイゼリアおよび西アフリカの多くでは五乃至五〇ポンドを女性側から要求される。ヌゴニ族では一頭五〇ポンドもする家畜を八頭も要求し、ローデシアのマショーナ種族のシャンハリ族では八頭の山羊、八頭の雄牛および一六〇ポンドの金銭を要求する。このような多額な嫁資を要求する習俗は、東アフリカや中央アフリカでは「ロボラ」と呼ばれて最近までずっと行なわれてきたので、男性独身者間の不満は高まり組織をつくっ

て女性側に嫁資の縮小を呼びかけ、政府からもこの嫁資に課税するなどして嫁資の縮減に努めている。

このように嫁資や「ロボラ」が支払われると、双方の側で結婚の準備にかかるが、異なった種族の結婚だと結婚日の決定が困難となる。共通して選ばれる曜日は木曜と日曜が多い。金曜は最も良い日とされているが、この日に結婚した妻は一方的に夫に頼りきりになり決して離れようとしないから、夫からの離婚が困難となるとして避けられている。

結婚式は夕方か夜に行なわれる。西アフリカの国々では両家が役所でおちあい当事者の結婚が登録される。西ナイゼリアでは、数年前には登録は義務であると同時に統計上必要とされ、結婚後二、三日または二、三ケ月後に登録がおこなわれていた。

男性が女性を「嫁盗み」するという慣習も法的に認められている。しかし女性が親の同意なしに男性から連れ去られたときは誘拐罪となる。「嫁盗み」は婚約の後か婚資が支払われた後に行なわれ、夜間でなく昼間に行なわれる。「嫁盗み」が行なわれる理由は次のごとくである。㈠ 公式紹介、婚約、嫁資の支払の過程を順調に経た後に男性側で華美な結婚式を挙げることが経済的に困難な場合には地方的慣習に従った「嫁盗み」が行なわれる。㈡ 結婚当事者双方の両親が婚約後に協議した上で行なわれることがあり、嫁資を受けても女性側の家族員で分割することを避けるためである。㈢ 女性自身が男性の恋人に「嫁盗み」を依頼することがあり、それは女性の両親が彼女の嫌いな男性を相手として選ぶ可能性のあるときである。㈣ 正式に結婚する前に男性側の家族によって早く嫁を迎えたい理由があれば「嫁盗み」が行なわれる。㈤ 女性側から要求された嫁資が余りにも高額な場合には男性側は七年乃至一〇年間働いても報われないので手取り早く「嫁盗み」の手段に訴えるのである。

以上のうち㈢㈣㈤の場合には、女性側の両親から裁判所に告訴されれば誘拐罪となり重い罰金が科せられる。「嫁盗み」は秘密裡に行なわれるが、女性の兄弟はそれを知っている場合には協力し、友人たちも協力する。「嫁盗み」が行なわれると、男性側の家族の代表は女性側の両親のもとに報告に行く。女性側の両親はすでに警察に娘の失踪を届出ているかもしれないが、この報告があり女性側の両親が同意すれば警察への届出は取下げられるが、反対すれば次の法的手段がとられることになる。

結婚した男女については、とくに両親の眼は新郎に注がれる。夫が妻を統御する能力があるか、家庭をつくる能力があるか、自主的な独立した考えをもちうるか等について関心がもた

れる。妻によってこれからの能力が砕かれ混乱させられるなら「弱虫」といわれる。つぎに、新郎は秘密を守ることができるかどうかが試される。夫が妻に秘密を洩らすことは厳に戒められねばならないし、これが守られなければ種族間の戦いに敗れることを歴史は教えている。たとい兄弟が姉妹にうちあけることがあっても妻と子には知らさない。さらに、新郎は重労働に堪え責任感があるかどうかを試される。

このように両親から新郎が観察される試験期間は西アフリカでは三、四年間が普通であり、中央アフリカでは一、二年間女性側の両親から観察され指導される。またザムビアのベムバ族では試験期間はまる一年であって、結婚はその後に確定され嫁資の未払分は現金で支払われる。

昔はアフリカに離婚は存在しなかった。それは各種族の社会的構造、自己満足、結婚当事者の両親間の融和等から当然とされていた。しかし今では世界の他の諸国と同様に離婚はある。ただ姦通とか虐待とかは主要な離婚原因ではない。もちろん夫婦の不和が極限に達すれば別居になるが、妻の欠点と不完全は第一の原因となり、第二は妻が育児を失敗したり早死させたりする場合であり、第三は嫉妬とか恨みとかが夫に妻を離婚させる原因となる。いずれの場合にも夫の家族は離婚に関係する。妻が夫の家族に無作法なふるまいをすれば強く謝罪を要求されるか、追出されるかである。もちろん妻は夫に激しくすがるであろうが、夫はたいてい自分の家族の方を支持し、せいぜい妻に追い出される前に自らすすんで別れを告げる方法を教えるぐらいのことである。姦通は離婚の原因としては重要でない。それは夫自身が他の人妻との間に交渉をもっていることが普通であるからである。夫が死亡した後に妻は寡婦として亡夫の家族と同居して生活するかどうかの決定権は、亡夫の家族がもっている。

イスラム教の強い影響下にあるアフリカの一部では、ハレムと称する婦人部屋があり、コーランの教えを遵守しつつ人眼を避け、織り縫い、結髪し、家事を行ない、顔を蔽う布を前にさげ、靴下と手袋をはめて、夜間に親戚や友人を訪問するために外出するが、空を見てはいけない、とされている。

つぎに第二章ではヨルバランドにおける結婚を中心に述べられている。

結婚は子供を産むために人生にとって本質的な義務とされる。子供に対しては身体上、道徳上、教育上の特殊な訓練を課し、さらに幸福な家庭をつくる義務がある。配偶者の選択は、主として両親が行なうが、気に入った相手がみつかれば友人や親戚を通じて連絡をとり紹介の段階を経る。男性側の両親か家族の代表者は女性側の両親か家族の代表者のところに行って話

をし、同意が得られれば祈りの形式による祝いをする。ヨルバの伝統によれば、このとき男性側の両親はなんら支払の義務はない。紹介の後にヨルバ語で「イダナ」とよばれる婚約となる。指定された日に女性側の両親と家族は家で待っている。

四〇個のコラナッツの実
四〇個のワニ胡椒のさや
四〇個の熱帯植物の種子
一瓶のオランダジン
一二本の山いも
一二本のコカコーラ
一瓶の蜂蜜
少額の金銭

これらの目録に載った品物は、男性側の家族の妻たちから女性側の両親に渡され、彼らもおおいに歓待される。これらの品物は女性側の父親から家族員に分配される。

婚約後に嫁資が支払われるが、西ナイゼリアではその額は女性側の両親によって決定される。

やがて男性側の両親は、結婚式の日どりを決めて女性側の両親に伝える。日どりが決まると、女性側の母や家族は娘に花嫁としての訓練に専念し、夫の親族をどう呼ぶべきかという身近かなことまで教える。

結婚式の二、三日前には遠くからの親戚が集まり、両家の祝いがはじまる。食べ、飲み、歌い、踊りながら結婚式の日を待つのである。花嫁の附添は六才から十才までの少女が選ばれる。結婚式の日、花嫁の家族は興奮しながら喜ぶが、同時に新しい未知の世界にふみこむ彼女の不安のために悲しむ。花婿の側では祝祭がおこなわれている。花嫁が花婿の家へ送られる二、三時間前に、彼女は自分の家族の讃美のために涙をうかべて歌を唱う。それから二、三分間祝婚歌に耳をかたむけるなどして、家族と別れるのに一時間ぐらいはかかる。彼女は次々に祈りと祝福を求めて廻り、母の前でヨルバの歌を唱う。

イヤ　ミ　スレ　フン　ミ
イレオーコ　ヤ
モ　フェ　ロ　デベ
キ　エミ　マ　フォモ　サビク

母は涙をうかべて彼女に語りかけ祈りをする。最後に花嫁は父の前に膝をついて唱う。父は彼女に手を置いて祝福し、もし彼女がひどい目にあったら夫の家からひきとることを含めたいくつかの約束をする。やがて午後九時頃に彼女は両親の家を出る。

花嫁が家を出ると太鼓が鳴り道をあけて行列する。女性たちの真中に花嫁がおり、男性たちの行列につづく。女性たちの行

列は歌を唱ったり手をたたいたりし、また男性たちの行列もおしゃべりしながら陽気に騒いでいる。行列は街や村の真中を歩き、花婿の家の近くまで進む。花婿の家族から挨拶がある。行列は家の入口まで男女の代表によって導かれ、花嫁は女性たちの最年長者の手に渡される。旧い習慣では、花嫁が入口の扉に近づくと四〇乃至六〇個の輪のついたビーズの下着のみを残して一枚づつ着物を脱いでいたが、この習慣に代って花嫁のからだに水をふきかけて濡らす習慣となり、さらに最近では足だけに水をふきかけるようにかわった。

花婿の家では、太鼓叩き、女性たち、男性たちは別々の部屋に集っており、花婿の家族のなかの最年長の男性がつぎつぎに挨拶にまわり、飲物や食物が配られる。結婚式の後に附添の少女は五日から九日間ぐらい花嫁のところにとどまる。花嫁は最初の夜を花婿の家族のなかの最近結婚した妻の部屋ですごし、翌朝早く花嫁と女中達は帰ってゆく。夫の家にはただ眠りに行くだけである。このことは事情のゆるすかぎり五日から九日間ぐらい繰り返えされる。

花嫁と女中達が夫の家に戻ってきた二日目の夜には「部屋着投げ」という行事がおこなわれる。花嫁と花婿は二、三フィート離れて立っており、まず花嫁は部屋着をゆるめて花婿に投げつけ、花婿はそれを受けとる。今度は花婿が自分の部屋着をゆるめて花嫁に投げつけて花嫁がそれを受けとる。この行事は誰でも見ることができるし、花婿の両親は必らず眺めている。みんな喝采し、花嫁の附添は大きな声でつぎのように唱う。

イヤウオ　イエゲ
グバングバ　ロリ
イヤウオ　イエゲ
ケデレ　ロリ

これは花嫁が処女であることを唱ったものである。

花嫁の附添は、五乃至九日間滞在した後に朝早く起きて黒い染料の原料になる或る種のツル草の葉を摘みとりに行く。この葉をつぶして水につけヨルバの歌を唱いながら家の周りを一周する。

オ　ニョーレ　ウォロウォロ
イレ　ヌコ　マナマナ

この歌は、この染料は家の輝きをすばらしいものにするという意味である。家に着くとこの液の二、三滴を地面に注いでふみつける。花嫁は花婿の家族中の一番若い妻とともに泉から水を汲んで運ぶ。家族の人たちに水を運ぶということは妻として最も重要な義務であり、アフリカの家族が成り立っている最重要な基本の一つである。花嫁の附添女が去っていって花嫁の家族の最年長者から花嫁を花婿に渡される。夜は静かに暮れ、花

婿と花嫁の二人きりになる。

翌朝、花婿は家族や友人たちから質問責めにあう。

オコ　リャーウォ　エ　ク　イロディオ
エジャ　タビ　アカン？
セエ　オ　リ　ベ？

この意味は、花嫁が処女であったかどうかということである。そして、その報告は必らず行なわれるが、種族によって方式は異なる。オリグボ族では、花婿の家族のなかの一人から口頭で花嫁の父へ知らされる。イフェ族では、数年前までは花婿の両親からつかわされた人に蓋のついた白いひょうたんを運ばせた。父はその蓋の真中を見る。もし真中に穴があいていたら父は失望する。花嫁が処女でなかったという意味だからである。処女であることがわかった花嫁には一ギニから一〇ポンドまでぐらいの金額の金銭が支われる。

処女であるかどうかの判断に迷っている花婿に対しては、花嫁が処女であることを主張し若干の金銭の支払が要求される。しかし確信をもてない花婿はその支払いを拒むことになり、争いになるという事例は多くみられる。処女でなかった花嫁は直ぐ実家に帰されるという事例も多くの種族でみられることである。処女であることが証明された花嫁は、高い道徳的水準をそなえた女性として尊敬される。花婿もまた妻の処女性について家族や友人たちに誇らしげに話す。

結婚まで処女であったということは、道徳的誇りであるとともに性病感染の危険性のなかったことを意味し、彼女の両親の保護ぶりについても誇りとなる。曾つてアフリカでは結婚するまで女性は処女であることは常識でさえあった。しかし、近年は多くの国で未婚の女性の性的体験を通して道徳的頽廃が云々されているとき、アフリカでは一九六〇年から四年間東部女子大学で四九名の女子学生についてスタンフォード大学のメルビン・フリードマン氏の指導によって調査した結果、七五パーセントは処女であることが示された。残りの二五パーセントは処女ではないが将来の夫となる男性に対して性交を制限しているという結果が判明した。

結婚して妊娠した二、三ヶ月間は、妻は胎児のために多くの迷信に惑わされないように午後の真昼間や夜おそくには外出しないが、そのほかは自由である。

子供が生れると、神を祝福するために最善をつくす。男の子なら九日目に、女の子なら七日目に名前が付けられる。双生児なら八日目に名付けられる。子供は生れてから名前がつけられるまでは母親の部屋で育てられ、母親も部屋を出るのは便所と浴室に行くときだけである。名付日の朝には、子供の髪の毛が切られて小さな容器に入れられて後日に埋められる。一人の女

性が屋根に水を投げ上げるために外に出る。屋根から滴りおちる水を子供の頭に数滴うける。この行事を見つめている人々は、この世に生をうけた子供のために喜び歓迎する。名付式は大広間で行なわれるが、主宰者の前に蜂蜜、コラナッツ、赤い油等がおかれ、名前が付けられると主宰者はその子供を抱きながら名前にふさわしく生きるように祈り、名前を発表する、名前の発表がおわると、主宰者は並べられた食物を少しづつ子供の口に入れる。例えば主宰者が蜂蜜の数滴を子供の口に入れるとき「ここに蜂蜜がある。それはたいへん甘い。お前の人生を蜂蜜のように甘くあらしめ給え」と祈る。みんなも祈りの言葉をとなえながら飲食し踊りがはじまる。

以上の第二章が四一頁でおわり、約三分の一以上をおえる。以下第三章では命名制度について、第四章では一夫多妻制、一夫一妻制等が叙述されており、第五章は迷信について、第六章は妻の社会的役割について記されている。そして最後の第七章では女性の海外生活やアフリカ共同社会の構造と特質について述べてしめくくっている。紙数の関係もあり、主として以下に第四章と第五章について要約しつつ本紹介をおわりたい。

アフリカの命名制度をヨルバ族の方法についてみると、㈠宗教上の名前、㈡父親の職業の性格、㈢生れたときの子供の状態、㈣子供の生れた場所、㈤両親の社会的地位等に因



んで名付けられることが多い。宗教上の名前についてはキリスト教やイスラム教の影響が多くみられるが、民俗的宗教による命名もある。最近はむしろヨーロッパやアラビア風の命名に対して反撥が高まりアフリカの民族的土俗的な名前を好んで用いるようになってきた。

アフリカの一夫多妻制は、決してイスラム教の宗旨によったものではなく、むしろ一般的に行なわれてきたものである。それは第一に過去の種族間の戦いによって男性の数が減少したこと、第二に子を産まない妻をもつ夫は子を産む第二の妻と結婚できたこと、そしてさらに第三には一夫多妻は富の証拠にもされたということも理由になる。アフリカでは妻が夫の他の妻と同居することはめずらしくない。妻は夫に対して自分以外の妻を世話することさえある。ただ彼女らを服従させることのみが重要である。一夫多妻制の家庭は決して混乱した状態ではない。最初の妻は必らずしも最年長ではないが、妻の頭として他の妻たちを管理する。彼女は他の妻のそれぞれと夫との調停役をつとめるし、掃除などの家事を各人の妻に割り当てさえする。最初の妻は他の妻から尊敬されねばならない。妻たちはそれぞれ自分の部屋をもち、最近ではテレビやラジオ等の近代的な設備さえそなえている。夫は離れた部屋に居る。子供たちはそれぞれ自分たちの母と同居している。一夫多妻につきまとう

嫉妬や偽善はあるが、ただそれを最小限に減らそうと努力されている。子供が生れると命名された後の二、三日間は母親と同居させるが、その後は別の妻のところにあずけられる。その妻はその子供の世話をし、家庭のしつけをする。このような世話をする妻がその子供の育ての母になる。結局、自分の同僚の産んだ子の母親として子供を育てることになる。これは、子供をもたない妻のさびしい感情を最小限にくいとめることになる。次に、夫の所有する子供に近づく自由と平等をどの妻ももつということを意味する。また、一夫多妻制は売春と妾の制度を最小限にくいとめる役割をも果すことになるし、また、一夫一妻制ではみだす女性に結婚の機会を与えることにもなる。一九六五年三月一八日ロンドン大学の学生討論会では、一夫多妻制に賛成する意見が圧倒的に多かった。しかし、学生たちは卒業して結婚すると意見を変えるのでこの討論の結論をもってにわかに将来を予測することはできない。ただ一夫一妻はキリスト教の教えによる伝統であった。一夫一妻制は離婚の比率を増加させる。一九五九年のイギリスの離婚率は同年のほぼ人口の同じなナイゼリアの離婚率の六倍であった。アフリカの人口は、USAとほぼ同じであり、インドの三分の一であるが、人口問題は重要になりつつある。しかし、それは決して一夫多妻制によるものではなく、また一夫一妻制によって救済されるものでもない。自己制限と家族計画のみがそれを解決する。

アフリカでは古くから多くの迷信的信仰がある。これらの迷信は科学的知識の普及によって消滅してゆくであろうし、また神話や神秘主義等にとって代るであろう。しかし、現在なお迷信は民間的信仰や習俗として存在する。若干の事例を示そう。

妊娠期間中は耐えられないほどの倦怠感や不安に襲われる。妊娠六ケ月以後になると日照の最高時間である正午から午後三時半頃までの外出は禁じられる。それは、精霊が河川や籔や大樹や山のなかに住んでいて最高日照時に妊娠した女体に出会うと胎児にのり移って子宮から追い出してしまい放浪者に仕立てあげるからといわれている。また、ニガーデルタの一種族では、赤ん坊が生まれると、その子が夫の子であるかどうかを確めるために河のなかに投げいれてその子が浮上すれば嫡出であるから直ぐ救助されるが、もし沈めば嫡出でないから溺れるまで放っておくという。また、双生児は善きにつけ悪しきにつけ超自然的能力をもっており、自分たちに不親切な人を殺すが、生きものすべての接待者であるから家族の誰からも大切にされ崇拝される。

つぎに、子供が生長して乳歯が抜けるようになると、子供はその歯を抜いて両親の部屋の前で歯と同じ大きさの小石七個を拾っていっしょに屋根の上に投げ上げ、歯が落ちる前に家のな

かに走りこむ。もしも家の中に入るまでに歯が落ちると、そのあとに歯が生えなくなるという。また、アフリカには道路の悪いところがたくさんある。子供を背負った母親がころんで子供を落すと、その子は病弱で家族に迷惑をかけるといわれている。また、赤ん坊の髪と爪を特定の日に母親の歯で切りとってピラミッドのように直立した石の下に埋めると、その子の守護神になるという。また、割礼はアフリカの全地域で行なわれており、それは子供が青春期を迎える前に行なわれると賢明になると信じられている。

そのほか、アフリカの迷信について多くの事例が記されているが、同時にそのいくつかに類似した迷信は今日なおイギリスをはじめ多くの文明諸地域でもまだ残っている、と指摘されているが、日本にも同様に類似した迷信や民間信仰はまだ多く諸地域に見られることである。

（本書の紹介にあたっては、愛知大学法学修士伊藤幸子さんの協力を得た。記して謝意を表したい。）